

山行報告

1741 水根沢 (鴨沢ノ金子変更)

期日 七月一日(日)
 参加者 永井L 橋本 以上二名
 報告

当初、小袖川からの金子まで二日間で予定したが、水根の都合で一日となり、奥多摩湖の土砂崩れのため水根沢に変更した。沢教室に参加しなかつた橋本にとつて都合である。

バス停から一〇分程歩き、ワラジにはき換える。軽快な河原も長くは続かず、陰険な沢へと変つて来た。一時間三〇分程でもう橋本はずぶぬれである。半円の滝を過ぎるまでに五回程落ちる。半円の滝を過ぎると、これといった悪場もなく、やぶこぎもせず石尾根縦走路へ。鷹巣山頂ではゴミの後始末を手伝い、あ

とは氷川まで駆けおりた。(橋本 善信)
 タイム 水根0・20 | 出合6・30 | 42 | 半円の滝8
 ・20 | 縦走路12・35 | 鷹巣山頂13・20 | 14 | 45 | 氷川
 17・05

1742 赤石岳 (夏山合宿)

期日 七月三日(金)~八月四日(水)
 参加者 永井OL 藤井SL 菅沼 天野 斉藤(正)(試)
 渡辺(孝) 橋本 稲垣 以上九名
 計画経過

五・一二 委員会 夏合宿の計画は六月山話会までに決めることで、山城として奥多摩、上越、美濃、只見、飯豊連峰等が提案された。

五・一九 臨時委員会 形式は縦走と大きな沢を同一山城で、山城は赤石岳と決定。リーダーも決まる。

六・三〇 山話会 合宿の計画発表
 七・一一 リーダー会 概略の分担決定

七・二一 打合せ会

橋本、稲垣以外は全員集合し各係の細部打合せを行う。安富不参加となり急ぎ菅沼を沢へ組み入れる。

七・二五 準備会

例年通り準備完了した。

行動計画

日 程	A 隊	B 隊
コース	奥西河内溯行	転付峠→赤石岳縦走
参加者	藤井 PL 菅沼 斉藤(正)	永井 PL 天野 斉藤(試) 渡辺(孝) 橋本 稲垣
三日	畑籬第一ダム→鶴首付近	田代入口→転付峠→
二日	赤石岳→(合流)	二軒茶屋
一日	上の廊下→	マンボー沢の頭→
予備日	百間洞露营地	千枚小屋

報告

☆七月三〇日(金) 晴

OA 隊 畑籬第一ダム→鶴首
 大井川鉄道の山岳夜行を利用して畑籬第一ダムまで入る。ダムから樫島まで、荷物をトラックで送り、我々は歩きます。空身なので調子よく飛ばす。

樫島で荷物を受け取り、一休みして出発。奥西河内出合の滝見橋のところから登山道に入る。少し行くと吊り橋があり、これを渡った所で沢に下る。ワラジにはき換え、左岸を進む。初めてなので、皆、水をきらって巻きながらゆく。鶴首の所で兩岸が立ちはだかる。ここは左岸を巻き、二〇米の懸垂下降で河原に下る。ちよつと行った所の砂地を今日の幕営地と決め、この後釣りを楽しんだ。(斉藤 正吉)

タイム 畑籬ダム7・30 | 8・35 | 樫島12・30 | 50 | 奥西河内取付13・17 | 55 | 幕営地15・25

☆七月三一日(土) 晴れ

OB 隊 田代入口→二軒茶屋
 肩をつつかれ目を醒ます。朝日が眼けまなこに眩し

い。赤石登山の玄關田代入口に着いたのだ。

転付峠（五万図では伝付峠）現在の南アルプスでは殆んど前山越えが省略されて居り、この転付峠も井川から樺島を経て二軒小屋まで入ることが出来る。然し乍ら、このクラシカルな長い峠越えは仲々味わい深く人気のあるもののようなのだ。今日の予定は転付峠を越え二軒小屋までだ。

田代入口より早川に掛かる橋を渡り、今は朽ちたかつての吊橋の下をくぐり、内河内川の出合いで大休止する。まともに眠る時間が無かったので食欲は進まないが、これからの行程を考え、兎に角にぎりめしをほろばった。

田代から広河原発電所までは車の通る広い林道歩きで、時折工事のトラックに襲われ砂ぼこりを吸わされる。こんな登りを三〇分もしない中、稲垣が暑さと靴ずれを訴える。大休止をとり手当てをし、リーダーが荷を軽くしてやる。確かに歩き始め、この暑さとザックの重さは寝不足の身に応える。

広河原からが本当の登りとなる。山腹を流れに沿いゆつくりと登る。二、三度早くも下山するパーティーに

がれが迫ってくる。

急ぎ二軒小屋へ向う。廻り道とやらに従い 沢ヶ岳方面へ少し進むと突然眺望が開け、明日の千枚岳悪沢岳が黒く大きくそびえ、二軒小屋迄下るのがもつたいないようだ。峠から二軒小屋迄もやはり五百米の高度差。これを一時間で下り、着いたのは六時。結局十時間要した。但し休憩は約四時間であった。（斉藤 武）

タイム 田代入口 8・00 } 20 } 広河原 10・05 } 保利
沢小屋跡 13・25 } 転付峠 16・45 } 17・00 } 二軒小屋 18・00

○A隊 鶴首上部―上ノ廊下手前

沢にはまだ日がさし込まぬ六時過ぎ出発。まずは今合宿最初の徒渉を断行する。足がしびれるほど冷たい水である。右岸から左岸、そして再び右岸となつてナメ状の瀑流帯のへつりに入る。再び左岸へ徒渉して進み、スラブにぶつかつたところで水をきらい高巻きに入る。尾根を越えようとルンゼに落ちており、しかたなくザイルを出して今合宿二回目の懸垂下降。

しばらくして沢は大きく広がり、ゴロの河原状と

出合う。沢筋と別れ小尾根を乗越す二百米程の急な登りがあるが、ここが今日の行動中最もきつい所であった。相変らずザックは重いし寝不足でボーと目が霞んでくる。中頃で一本立てたが直ぐに眠りに誘われる。

これを登り切り次の沢を渡った所で大休止。初めは小休止かと思っていたが、沢で頭から水をかぶったり汗を拭いたりしてサッパリしたら寝込んでしまった。結果的大休止。出発する頃は一時近い。まだ予定の半分も来ていないのに。新人はのんきなもので、現在地を転付峠直下などとのたまう。

ここから転付峠直下までは再びゆつくりした登りだ。ペースは快調で保利沢小屋跡を過ぎ一時間で直下まで来てしまった。最後の沢で一本。

これからがあれ（？）の転付峠の登り。高度差五百米。先程の二百米が何分かつたから今度はなどと予想を立てたが全く見当がつかない。然し乍ら峠まではうまく道が切つてあるので登り自体としてはさほどきつくはない。荷が軽く睡眠ならば富士を背にさぞ楽しいであろう。途中三〇分の休憩をささみ二時間二〇分で待望の転付峠に出た。時は既に五時近く、たそ

なる。朝の光がいつばいにさして、すっかり解放的気分ひたる。遠く悪沢岳、千枚岳を望みながら一本。まずは今日も天気の良いことまちがいなし。昨日のヤマメ釣りの成功も手伝つてメンバーの余裕ある顔。

谷は再び狭まり、菅沼トツプで右岸をへずり、大岩をシュリンゲをひっかけ、はうようにずり上つて越えたが行手をはばまれ、ひきかえして下流を徒渉する。ナメ状を越え、腰までの徒渉。ここは足の長いものが勝ちだ。ほどなく下沢沢の出会となる。快調なピッチである。このすぐ上部が樺沢の美しい出合。階段状の滝が連続して流れ落ち、一本立ててしはし観賞する。

この辺から所々ラジオリヤの赤い岩が水面に顔を出し、目を楽しませてくれる。北沢の出会付近は大きく開け、真夏の昼下りの日ざしにジリジリ焼かれる。縦走隊の転付越えがしばし話題となる。ナイヤガラ風の広い滝を越え、右岸に美しいルンゼの小滝を見ながら進むと突然上砂沢出会となる。水流は大きく二分され、上砂沢が予想外に大きいのに驚く。ここから本谷の傾斜は急となり、魚の臭いが消えた（と信じる）。城門の滝にぶつかつた所で一本。朝歩きはじめてから

九時間経過し皆の顔に疲労の色が出てきた。最後の力を出してもう一ピッチ、大きな岩に登ったところでその下に手頃の幕営地を見つけ、今日のおかん場に決める。地図を広げると上の廊下も真近い地点であり、驚くほど距離をかせいだ事がわかる。流しそうめんはいただけなかったが、余裕ある気分ではたき火を囲み、沢の音を聞きながらしばしよま話にふけた。

(藤井 諭)

タイム ヤマメ淵6・05 | 河原9・00 | 下砂沢出合11・05 | 樺沢出合11・35 | 北沢出合12・40 | 上砂沢出合14・00 | 幕営地15・30

☆八月一日(日) 快晴

○B隊 二軒小屋 | 千枚小屋

千枚岳へと続く尾根が黒々と威圧するかの様にせまってくる。「今日はあの急坂を。。。。」と考えると期待と不安の入り混じった妙な心持になる。あえぎながら塩見平を過ぎる。少し登った所で、とつておきのレモノードを作る。本当にうまい。二二七一米のピーク手前のガレ場越しに、荒川三山、赤石岳が望まれる。

る。西河内の出合を過ぎる頃より沢の中に陽が射してきた。左にガレのルンゼを見送ると沢は右に曲ってゴルジュとなる。上の廊下だ。連続する小滝を快適に登る。だんだん暗くなり、目の前に大岩壁があらわれ、奥西河内の大滝にぶつかると。落差一〇〇メートル、水量、スケール全てに圧倒されてしまった。しばらく大滝を見物していた。

高巻きルートの偵察をする。我々は左岸から高巻くことにする。すぐ横に流水のあるルンゼがあり、それを利用して高巻きを試みたが、岩がモロく、途中五メートル位の垂直の滝でつまってしまった。全身ビショぬれになつての悪戦苦闘の末結局右からの高巻きをあきらめた。

右岸からの高巻きは簡単で、少し下ると踏跡がありそれに従ってルンゼをつめる。ルンゼの最上部付近から右へ巻くとヤブもなく大滝の上部に出ることができた。

この辺が森林限界らしく、沢も明るくなり展望もひらけてくる。小滝をすぎてゆくと、稜線を歩く人の姿が見える。もう水源は近い。左の小赤石側より湧水が

しばし歩を止め、その光景に見とれる。千枚岳も間近である。今日は、あそこまでだ、と思うと、安堵のため息も漏れる。ロケット雨量計を過ぎ、小さなビークを越した所が万斧沢の頭。ここで大休止とする。いよいよ千枚岳への最後の登りである。ダケカンバや、ハイマツの入り混じった林を、どんどん高度を上げる。ハイマツの岩礫帯へ出ると、もう幕営地は目と鼻の先。千枚岳、千枚小屋分岐で、永井、天野、稲垣は幕営地へ、斉藤、渡辺、橋本は千枚岳山頂へと向かった。それぞれ、のんびりと一時を過ごした。その夜、千枚小屋で盲腸患者が出たとの事で、二〇時三〇分頃、救助の為、天野、斉藤は天幕を後にした。

なんとも寝苦しい一夜だった。(橋本 善信)

タイム 二軒小屋4・50 | 二二三二米ガレ場8・20 | 25 | 万斧沢の頭9・25 | 10・00 | 千枚小屋分岐11・40 | 12・00 | 幕営地12・10

○A隊 上の廊下 | 荒川小屋

ここまで登つてくるとさすがに水が冷たい。七時に遡行開始する。まだ大石の滝が多く、登るのに苦勞す

ありそこで水が洒れている。天気も良く暑いので大休止をとる。

本流を忠実につめるとハイマツ帯にぶつかると。右にさけて小尾根を越すと簡単に縦走路に出ることができた。

長かった奥西河内の遡行の終了点だ。悪沢岳がやけに高く印象的だった。あとは縦走路を荒川小屋へ歩く。小屋に近づくにつれ、荒川岳が大きく威風堂々とそびえていた。昨日とはうって変ってさすが稜線は人が多い。

ツエルトを張り、あとはのんびり小赤石、荒川岳の暮れゆくさまを眺めていた。(菅沼 博)

タイム 幕営地7・10 | 西河内出合7・40 | 50 | 大滝8・20 | 9・10 | 右岸マキ10・10 | 大滝上11・20 | 12・10 | 源流13・00 | 14・00 | 縦走路14・30 | 40 | 荒川小屋15・00

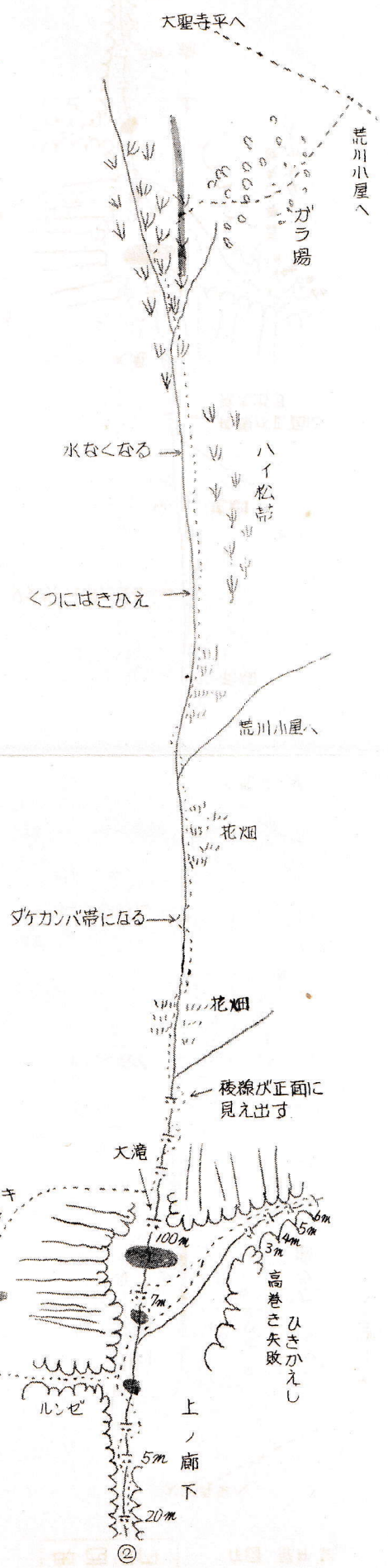
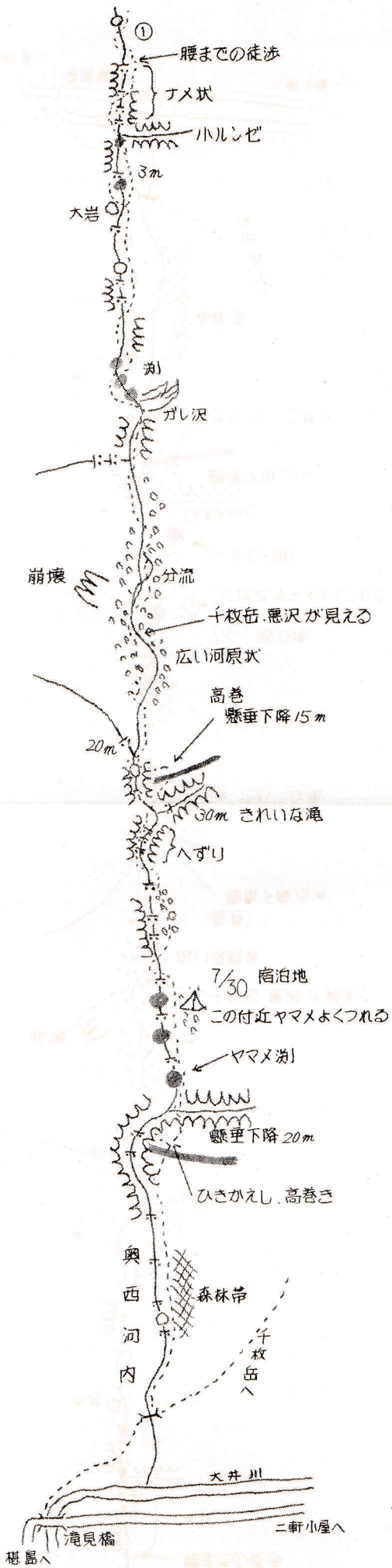
○病人搬送隊 千枚小屋 | 樺島 | 赤石岳

P 天野 斉藤 (武)

今合宿での最難関、二軒小屋からの登りを終え、し

奥西河内

作図 藤井 諭



かも全員コンディション上々という時に、とんでもないハプニングが起った。夕食後のんびりしていると、千枚小屋の従業員が来て、病人が出たので樫島までおろすの手伝ってほしいと言うのだ。こちらは明日の行動もあるしホイホイとはいかず難色を示したのだが、二回も三回も来られると断り切れない。リーダーの判断で天野、斉藤の二名が応援に出ることとなった。

小屋へ行くとすでに出発の準備をしていた。病人は単独行の者で急性盲腸炎であるらしい。搬送の為に集まったのは、小屋番の一人の他、小屋に泊る予定であった人、幕営地にいた人など計八名である。出発二〇時半。夜道はジリジリと照りつける直射日光もないし、先も見えないので、かえって楽なのではないかなどと思つてはみたが、やはり自分の番が回つて来て人間様を背負うとズッシリと重い。一五分ともたなかつた。時間を争うことなので、とにかく速く歩いてどんどん交代することである。休憩は交代時の一分程度である。この藤段の尾根は地図で見ると長いが非常に緩傾斜である。予想通りの歩きやすい道が続いた。尾根を離れて奥西河内へ下るあたりは、山腹の急斜面につ

四〇分に出発した。背中にチヨコンとサブザツクを背負つただけの空身とは、こんなにも足が軽やかに進むものかと、はじめはいささかオーバーペースであつた。赤石小屋を過ぎてからは天候もあやしくなり、同時に我々の歩調も疲れが出たためかあやしくなつた。四五分ハイスピードペースが三〇分になり、二〇分ロースピードペースとなつていった。東尾根のコースは富士見平を越えると山腹をトラバース気味に進み、いつたん赤石沢の北沢源頭へ降りてしまう。一面のお花畑で源頭の沢音だけが風に乗って強弱のアクセントをつけている。あとは静寂そのものである。何とも好ましい雰囲気のはずなのだが空模様はますますあやしくなつてきた。霧雨が舞い、風が強くなつていく。稜線に顔を出したとたん身体の位置を保つことを考えなければならぬほどの風雨となつた。あわてて雨具をつけた。赤石岳山頂では斉藤と握手しただけで一分とたぬ内に退散であつた。避難小屋でサポートすると書いた〇M〇の連絡板を稜線に出たところで見ただが、その避難小屋がどのあたりにあつたか記憶が定かでない。濃い霧の中、視界ぎりぎりのあたりに小屋らし

けられた道なのであろうが、なにせ暗くてこれから歩を進める数米先しか見えないし、見ない。危なっかしい吊橋は小屋番の方が勇気をふるい起こして何とか渡り、滝見橋へ上がるちよつとやばいと言われた稜道の部分は斉藤がうまく通過した。林道に出てから樫島までの間は、ホツとした気のゆるみかどうか、さすがに腰から下がガクツときたものだ。まっ暗な中に何軒も建ち並ぶ樫島の集落の中で、夜霧の草っ原に腰をおろしてビールを飲んだ。時計は午前一時を回っていた。やっと終わったわいと思つた時、思い出したように睡魔が急速に訪れた。病人は車で井川へ下つていった。

(天野 一郎)

タイム 千枚小屋20・30 樫島1・00

☆八月二日(月) 曇り後風雨

○病人搬送隊 樫島―赤石岳―百間洞露营地

樫島の朝はすこやかであつた。十分な眠りをとれたとは言いがたいが、とにかく屋根の下でぐっすり眠つたのである。赤石東尾根を登れば今日中に百間洞泊りの本隊に追いつけるであろうとの見通しを立て、七時

きものを認め、ちよつと寄つてみるかと歩を進めた。たん〇M〇がどうのこうのと交信の音が聞こえた。避難小屋に藤井、斉藤(田)が待つていてくれたのだ。久々にあたたかい紅茶とラーメンを腹におさめる大休止をとることができた。一時間後、再び風雨の中を四人で百間洞へと下つた。

(天野 一郎)

タイム 樫島7・40 赤石小屋11・35 〇―赤石岳14・30 避難小屋14・35 〇―15・30 百間洞16・40

○B隊 千枚岳―赤石岳―百間洞露营地

午前二時起床。普通ならまだ夢の中の時間。すぐに朝食をつくりにかかる。天野さんと斉藤さんが虫垂炎患者をおろすために縦走B隊と分れたため、朝食が残る。また、両名の共同装備・個人装備を四名が分担して背負うことになった。その分担の割り当て、天幕の撤集等て出発は四時となった。まだ星の輝きが陽の光よりも強い。ゆつくりと千枚岳に向い、頂上直下で夜明けをむかえる。ここで、小休止を兼ねて、朝日に輝く山々をカメラにおさめる。本日の主役、赤石岳が美しい。岩場の登り下りをくり返しながら東岳をめざす。

東岳頂上付近で大休止。赤石岳に笠雲がかかり、天気が大きくくずれないことを願う。荒川三山を過ぎ、荒川小屋にかかるころからガスが出始める。大聖寺平では視界が百メートルほどになり、風も強くなる。大聖寺平の大きなケルンの脇でツェルトをかぶって休む。ツェルトのあたりがたさをつくづく感じる。大聖寺平から小赤石への登りは長くまたつらい。小赤石から赤石岳へは稜線上なので体に感じられる風が強い。雪溪を見ながら、天気がよければこの雪溪でアイスコピーをつくらうと言っていたことを思い出す。赤石東尾根との合流点に天野さんらへの伝言を書いた板を残す。ガスは濃くなり、赤石岳頂上で藤井さん、斉藤正吉さんとあやうくすれ違いになりそうになる。赤石岳頂上に立っても視界もきかずいささか残念。頂上直下で天野さんらのサポートの方法を話し合う。縦走隊は百間洞露营地に向う。ガレ場を下り、ハイマツに囲まれた尾根を歩く。百間平はその名のとうり、野球場がいくつも作れそうに広い。ここを過ぎると再びガレ場となり、途中、百間洞で天幕を張れずに文句を言いながら登ってくる人とすれ違う。こんなところにほんとうに

露营地があるのだろうかと下るのにあきたころ百間洞露营地に着く。(稲垣 伸治)

タイム 幕营地 4・10 | 千枚岳直下 4・50 | 5・15
 | 荒川東岳 6・40 | 7・00 | 中岳 7・35 | 8・15 |
 荒川小屋 9・05 | 28 | 大聖寺平 10・20 | 45 | 小赤石岳
 11・50 | 赤石東尾根分岐 12・35 | 赤石岳山頂 12・45 |
 13・10 | 百間平 14・50 | 百間洞露营地 15・25

o A 隊 荒川小屋 | 百間洞露营地
 荒川小屋を出て大聖寺平六時半、それから交信時間までツェルトをかぶって待つ。富士山に笠雲がかかつて悪天の兆がある。

交信によつて始めて天野らが急病者の運搬に樺島へおられた事を知る。交信の結果、我々は一足早く百間洞へ向い混雑が予想される天場を確保することになった。小赤石の登りからすでにガスにつつまれ、風が吹きはじめて寒い。風にせきたてられるように赤石岳と別れ、百間洞へ向う。百間平のあたりからは視界十メートル以下となる。百間洞着十時半。天場を確保したあと、菅沼を残して藤井と斉藤は縦走隊のサポートに向う。

再び赤石岳山頂にひきかえしたところで永井ら縦走隊と合流する。悪天と重荷に疲れていたが、打合せの結果我々二名は避難小屋で天野らを待つことにし、永井らはそのまま百間洞へ向った。寒い避難小屋で待つこと一時間余りちやうど交信時間にひよつこり天野らが入ってきた。うれしい一瞬であった。

これで無事合宿メンバー全員がそろつたことになり、雨風の中を百間洞の幕营地へ急いだ。(藤井 諭)

タイム 荒川小屋 6・00 | 大聖寺平 6・30 | 7・50
 | 赤石岳 9・15 | 百間洞 10・35 | 11・05 | 赤石岳 12・45
 | 避難小屋 13・15 | 15・30 | 百間洞 16・45

☆八月三日(火) 曇後雨 百間洞露营地 | 大沢渡 | 程野

夕べの雨も上り、ぬれたテントの撤収。バックキングも終え、大沢岳まで急なガラ場をほとんど登る。昨日下った赤石岳を後ろに見る。大沢岳を過ぎるとポツポツと雨、昨日より風はやや弱い。

下に北又沢、大沢山荘、林道を見ながら急な下りを足を笑わせながら下る。2ピッチで大沢渡まで、雨粒は、ほとんどなくなる。北又沢から軌道に上るのにま

ごつく。雨具を雨がたたく単調な軌道を吊橋まで、吊橋を渡ると急な上り、道は広く登りやすい。しばらく登って道が二又に、右の狭い道を行く。林道までかなりの登りだった。林道に出るとなぜか足が軽くなる。あいかわらず降りが強く夏なのにかなり寒い。程野に向けてただ進む。途中すれ違ったダンブが帰りだからとバス停まで乗せてもらった。かなり激しい雨だったので、大変助かった。全員がぶぬれなので作業小屋の軒を借り暖を取りバスを待つことにした。ここで解散とし、和田の大島屋旅館に宿をとった。(渡辺 孝)

タイム 露营地 6・25 | 大沢岳 7・20 | 45 | 大沢渡
 10・40 | 11・00 | 吊橋 11・30 | 林道 13・45 | 程野 15・30

◎各係の報告

☆気象

三一日 一・〇〇 広河原の上 二五度 晴
 一八・〇〇 二軒小屋 一七度 晴
 一四・一五 二軒小屋 五度 晴
 一八・〇〇 千枚幕营地 一三度 晴

二日 四・〇〇 千枚幕営地 八度 晴

一八・〇〇 百間洞 八度 霧雨

三日 六・〇〇 百間洞 七度 曇り

日中は曇り時々雨一雨

時間通りにきちんと計測しなかつた為、データにはならない。一日午後四時につけた天気図から二日三日の天候を予想できなかつた。曇りがちぐらいに予想したのだが、実際は雨となつた。(係 天野)

☆食料 (A隊)

食料はある程度の軽量化のためインスタントを主にした。又魚は釣れるか不明だったので献立には加えず副食として考えた。

冷し中華は小さいコップフェルコでは冷せずそのまま食べることにまつてしまった。これらいろいろ不手際が多かつたにもかかわらず全員の協力で何とかやれました。又合流後の食料を持っていたいただいたB隊の方々にも合わせて感謝します。(斎藤 正吉)

夏山合宿食料計画 (A隊用) 三人分

一九七六・七

7/30 朝・各自

夜・〇豚汁(ワンタツチライス4袋、肉みそづけ200g、長ねぎ2本、人参1本、ゴボウ1本、じゃがいも2コ)、つけもの1/2パック

7/31 朝・カうどん(うどんろこ、もちろこ、ねぎ1本、しいたけ少々)、ハム少々、つけもの1/2パック

夕・冷し中華(中華そばろ、さやえんどう50g、焼のり3袋、のり玉1、ハム少々)

8/1 朝・もち雑炊+すまし汁(もちろこ、ワンタツチライス3袋、玉ねぎ1、人参1/2、コンソメ2コ、とろろこぶ)

夕・カレーライス(インスタント)
(ワンタツチライス4袋、ジフィーズカレー1箱、コンビーフ1カン、スープ(インスタント)3) うめぼし6

8/2 朝・カレーメン(もちろこ、ラーメン3、長ねぎ1、うめぼし6)

夕・本隊(B隊)と合流

行動食・7/30~8/2の4日分用意

一食当り 月餅1、乾パン15コ、オイルレーズン1/2、チーズ1、せんべい2、キャンロップ4、ゼリー4

予備食・ワンタツチライス・赤飯3袋、ラーメン6

行動食(月餅をぬく) 6

調味料・塩50g、粉末ソーダ1袋、砂糖200g、しょう油100cc、紅茶10袋、緑茶50g

☆食料 (B隊)

当初装備係補助の予定だったが、リーダーから食料係をせよとの電話を受け、気軽に引き受けてしまった。チーフとは思わなかつたからだ。

それからが大変だ。準備会でいきなり献立を作れと言う。少しは考えていたものの、先輩方が持参してくれた以前の合宿のレポートのおかげでやっと出来たのが別表の食料表である。

準備会での食料買い出しはほぼ思う通りに行った。

また計画表では五日分を予定していたが、山行が順調に進んだ為、第四日夕食の鳥釜飯とごつた煮の一部が第四日朝食の純和風朝食に組み入れられたので豪華な朝食となつた。

各回の食事はかなり良かったのではないかと自負している。食当並びに指導に当つた先輩方に感謝したい。ただ食料計画表はこれだけで充分食事が作れる様に出来ているのであるから、特に準会員はいちいち食料係にどうするか聞かなくても良い様最低料理の素食ぐらいは養つて頂きたい。

初めての食料係の感想はこの位にして、今回の反省及び今後参考になる点を以下に挙げる。

〇大ナベでみそ汁等を作る場合、五百グラムの味噌が適量であつた。従つて今回は豚汁、雑炊、みそ汁であつたので多少不足気味であつた。しかしダシを多めに入れることに依りかなりカバーできる。

〇力(ちから)ラーメンの餅は真空パックを使用した方が、柔らかいので、ラーメンが出来てから少時間煮込んだ方が良い。またラーメンにコンビーフを入れるの

も良い。なおラーメンは一人分余分に入れた。

○酢豚の素は六人の処、十二人分入れた。多少酢が効き過ぎたが、味としては大ナベで作ったので適量であった。また酢豚の肉をコンビーフから急ぎよ九人分のベーコン(四百グラム)に変更したので、野菜、肉とも満足の行くものとなった。干し椎茸も風味を増した。なお、酢豚はそれ程時間を要せず作れるので、合宿の献立に今後とも組み入れて行きたい。

○鳥雑炊も初めての試みであったが、好評であった。鳥肉は水煮カン詰を使用した、今後は骨付きでないものが良い。

○カレーライスはいつもの通りだが、酢豚同様、カレーの素を九人の処、十二人分用意したので、カレー汁になるのを防ぐことができた。

○鳥釜飯はいろいろな材料が入った素を炊き込んだものだが、これも素は多めに用意した。またこれにコンビーフを加えたのも良い。コンビーフは何かと利用範囲が広い。みそ汁の生わかめ(塩漬)は一度水につけて少しでも塩を抜いた方が良い。

○行動食は五月合宿をそのままコピーした。レモネー

ドが好評であった。

○ビニール袋は、大二〇枚と小四〇枚二袋用意したが、準備会用のものとは別に、ゴミ持ち帰り用のものを用意した方が良い。

以上ですが初めてでしたので不手際があったことをお詫びします。(斉藤 武)

夏山合宿食料表 (B隊用)

○七月三一日夕食より八月二日朝食まではB隊六人分
八月二日夕食以降はA隊と合流し九人分である。

7/31 タ・豚汁(米五合、豚肉・みそ漬300g、長ねぎ

3、人参1、ごぼう3、じゃがいも2、

ふりかけ1、漬物1)

8/1 朝・カレーメン(みそラーメン7、餅6、長ねぎ2、ソーセージ2)

タ・酢豚(米五合、酢豚の素十二人分、ベーコン400g、玉ねぎ3、ピーマン4、人参1、干しいたけ1袋、ラード、ふりかけ1、漬物1、ラー油)

8/2 朝・鳥雑炊(ワンタツチライス6、長ねぎ2

みそ、鳥水煮カン詰1、漬物、ダシ)

タ・カレーライス(米八合、カレーの素十二人分、ham 500g、玉ねぎ4、人参2、じゃがいも3、福神漬2)

8/3 朝・純和風朝食「鳥釜飯」(ワンタツチライス

9、鳥釜飯の素十二人分、コシビーフ1カン)

みそ汁・みそ、いんげん豆、ねぎ3、生わかめ、じゃがいも2、ダシ、梅干18、ふり

かけ2

予備食・ラーメン9、乾パン450g

行動食(二人分)

菓子パン2、煮干5、東鳩ビスケット50g

乾パン50g、ミルク18、チョコレート2

ゼリー4、チーズ1、サラミ1本、レモン

1/3

調味料・嗜好品

みそ500g、だしの素1袋、しよ油小1ピ

ン、塩1ピン、ラード1本、コシヨウ1本

ラー油1本、日本茶100g、紅茶ティーパツ

☆装備(A隊)

三ツ道具、アブミ等を持参したが、実際には高巻きのあとアップザイレンにザイルを使用した程度だった。今回は特につり用具を二セット持参したのだが、下流域ではよく釣れ重宝した。

尚持参した共同装備は別表の通りである。

○A隊共同装備表

幕営用具・ツェルト1、細引6m、20m1本

炊事用具・石油コンロ1台、石油1リットル、ロー

ソク2本、ロールペーパー1巻、コップ

エル1式、メタ1箱、風ホース1本、

マナ板・庖丁等1式、焼アミ1枚

行動用具・トランシーバー1台、針金・ブライヤー

1式、温度計1本、ナタ1本、古新聞若

干、薬品1式、釣道具2式

登攀用具・ザイル9m、40m1本、アブミ2本、ハ

ーケン各自2枚・6枚、カラビナ各自

2枚・6枚、シュリンゲ各自3本・9本

☆装備 (B隊)

装備で足りないものは特になかったと思う。

○B隊共同装備表

- 幕営用具・天幕1 (NO4) ツェルト1、夏スコップ
- 炊事用具・石油コンロ、ポリタンク (石油入) 1・
- 5リットル、コップエルセット1セット
- お玉、茶コシ、庖丁、しゃもじ1セット
- メタ1箱
- 行動用具・ロールペーパー3、ベニヤ板2、トラン
- シーバー1、ラジオ1、天気図用紙10枚
- 温度計1
- その他・岳連ベナント1、ビニール袋少々、予備
- 電池32本、ローソク (太) 4本、修理具
- 1式

☆ 会計 (永井 正敏)

入	参加費	A隊 9,000 × 3	27,000円
		B隊 6,000 × 6	36,000円
		カンパ	2,000円
		計	65,000円
出	食料	33,450円	
	備費	4,640円	
	療品費	1,000円	
	通費	9,000円	
	幕営料	5,880円	
		下山	9,530円
		その他	1,500円
		計	65,000円
		収支差引	残高 0円

☆合宿反省会記録

大島屋旅館にて

行動について

トッパはパーティーのことをもつと考えておくべきであった。
 食料について

沢が食料が貧しかったのは行動の性格上やむを得ないが、現地調達がうまくいった。
 縦走隊の献立はよかった。

装備について

石油は縦走隊3リットル、沢隊1リットルで足りた。沢はたき火で燃料節約になった。
 沢隊はザイル一本で十分だったが、縦走隊も非常時のサポート用にザイルが必要だったのではないか。
 夏天NO4は快適だが八人が限界だ。
 トランシーバーが不調だったので購入したい。
 全体として

沢隊が沢に在る間好天気だった事、一時救助の為にパーティーが分れたが濃いガスの中で三隊がうまく合流できた事。など、幸運な面が大きかった。

トランシーバーでの交信は混信が多く、周波数の検討や、混信のない午前中に交信するよう注意すべきである。

百間洞では、沢隊が天幕場を確保したが、すぐいっばいになってしまい、張れない人もいた。縦走路の設置場所がなく、むずかしくなってきた。悪天

時は午前中に確保が必要。

後記その一

永井 正敏

トランシーバーで赤石ひなん小屋との交信中、ちょうど赤石東尾根パーティーが小屋に来たとの知らせに、ほっと胸をなでおろした。後の行動の打合せもろくにしないまま、天野らを急ぎ救助に向わせた千枚小屋幕営地からはるかに遠くここは百間平、風雨吹きすさぶ中であつた。その夜の仲間達の姿が、とても頼もしく思えた、すばらしく充実した合宿であつた。
 準会員諸君も、初めての縦走で、三〇キロのキスリングを背に風雨の中を歩いて頑張ってくれた。
 初めての合宿のチーフの重任を無事果たす事ができた事は皆のお陰と思つている。

今回のような集中形式の山行は、うまく会えるか一つのみずかしさがある。特に今回の様に、予定の変更があつた時はそうであるが、感激的な出会いが今回の合宿を豊かなものにしたと言えよう。

しかし、これは裏をかえせば、会えない危険性を含んでいる。なまじ合流できない為に、無駄な心配をし

たり、行動を制限される場合が起きてこよう。その点で、今後の山行では、その形式をどのようなものにするべきかについて、参加者の討論するべきではなからうか。参加者が目的をわきまえていなければ、不本意な山行になる危険性があるからである。

カンパを下さった方、見送り、差し入れを下さった方、どうもありがとうございました。

後記 その二 (藤井 諭)

奥多摩の沢登りの経験を生かし、より大きい沢を数日かけて遡行する事は日常活動の目標であった。今合宿においては、荒川三山と小赤石岳に源を発する奥西河内に計画を立て、実行した。計画にあたっては特に荷物の軽量化を考慮し、また釣りを一つの目的として準備した。

奥西河内を遡行して感じた事は、水量の多さと長大さ、そして下流から中流、上流、稜線とくり広げられる変化に富んだ場面であった。まさに沢登りは一つのドラマとも言える。沢は全体に明るく、徒渉の連続で高巻きは少なかった。大滝の耳をつんざくようなごう音と共に一〇〇メートル一気に落下する、圧倒される

ようなすごさは今でも目に焼きついている。そして上流では美しい稜線の展望に兩岸の花畑と、別天地のようであった。

全体を通して沢の中では安定した天候に恵まれ、体調すぎる進み具合で、出合より稜線までちょうど正味二日であった。普段の沢の積重ねと、パーティの足が揃っていたためである。又、四五五年の赤石沢の記録(小川田、富士野、塚田)が参考になった。

最後に奥西河内遡行の機会を与えて下さった会員の方々に感謝すると共に、今後とも大きな沢を他の会員が遡行されることを期待したい。

1743 浅草岳

期日 八月八月(日)

参加者 天野(単独)

田子倉湖の畔より歩きはじめる。只見沢を溯る予定であったが単独行なので、まずは一般ルートから浅草岳に登ることにした。沢沿いの道は何となく上高地あたりの樹林帯に似ていて、なかなか雰囲気よろしい。

地元の観光協会が立てた案内板が所々にある。熊を追うマタギが二手に分かれた所だとか、熊のツメ跡だとか書いてある。尾根上に出ると正面に浅草岳が盛り上がり、只見沢をへだてて鬼ヶ面山の東面岩壁が荒々しい。ヤブツシユが多いけれど雪渓もあり、スラブや

岩の様子が一ノ倉と似ている。只見沢は、鬼ヶ面山へ抜けるには三ツ道具を要しそうだし、浅草岳へ抜けるにはひどいヤブこぎを強いられる。いずれにしろ単独では無理と判断して、これから浅草岳の頂上を往復してくるだけにしようとのんびりと歩いた。浅草岳の山頂は狭いが、西の肩のあたりは池糖がちらほらあり昼寝にはもってこいの草原であった。一時間以上眠った。帰りは同じコースを田子倉湖へと下った。

タイム 登山口9・10-浅草岳12・50-14・30
登山口16・30

1744 日川尾根

期日 八月八月(日) 晴

参加者 塚田(単) 塚田(単) 以上二名

前夜、車で天目山栖霞寺のところまで入り、村営駐車場が仮眠する。

起きてみると、絶好の登山日和で、青空がまぶしい。軽く朝食をとり、更に延びている日川林道をのんびりとたどるが、なにしろむし暑い。途中、キャンプをしている人達が、ワイワイと楽しそうにやっているのを横目で見ながら嵯峨塩鉱泉まで一ピッチ。袖坂峠への取付を捜すが、行き過ぎてしまったりで、無駄な時間を過ごしてしまった。数軒の開拓部落の中を通り、彼らが作っているりんどろ畑に、見惚れながら進むと、袖坂峠の取付である。取付といっても道標があるでなし、地図を頼りに、かまわず尾根に向って草の中を踏み入ると、すぐ道に出た。あまり歩かれていないので途中ヤブがうるさいが、それもたいしたことなく、峠へ出る。のどかな峠からは、今年甲子園出場の高松商業高校がある塩山市の街並みが、手に取るように見下ろせる。

さあ、日川尾根だ。

ヤブがひどいとの話であったが、ちようど草刈りされた後で、実にのどかな尾根歩きだ。源次郎岳分岐付近